会議録

| | |
|---|---|
| 会議の名称 | 社会教育委員の会議（11月定例会） |
| 開催日時 | 令和４年11月25日（金）午後２時から午後４時まで |
| 開催場所 | 田無第二庁舎３階会議室 |
| 出席者 | 委　員：川原議長、小松副議長、伊尻委員、勝野委員、黒羽委員、河野委員、<br>坂内委員、菅野委員、攝賀委員、高橋委員、長谷川委員、宮本委員、松本委員<br>事務局：神保社会教育係長、野田主事 |
| 議題 | （１）執筆分担について<br>（２）提言について |
| 配付資料 | |
| 記録方法 | □全文記録　□発言者の発言内容ごとの要点記録　■会議内容の要点記録 |

会議内容

●議題について

議題（１）　執筆分担について

○事務局：前回の会議で執筆分担についてご検討いただいた。10月定例会でご欠席された委員には11月定例会前に事前にお伺いをし、反映されたものを参考資料として配布している。

○議　長：執筆分担のイメージは、各定例会で各章ごとに全員で議論をし、その議論をまとめて文章化する作業を各委員にお願いするイメージである。

議題（２）　提言について

○事務局：前回の10月定例会では第２章について議論をいただいた。
11月定例会では第３章人材の育成、活用（１）人材の育成に向けたプロセス（２）人材の活用について議論をいただきたい。
今回の検討内容を文章化したものの検討は来年２月を予定している。

○議　長：本日は、第３章の（１）人材の育成に向けたプロセス（２）人材の活用について、10月定例会と同様にトーキングスティックという手法を用いて議論を進めたい。
（１）人材育成に向けたプロセス、特に社会教育の担い手の発掘や将来の担い手の発掘や研修について、どなたかご意見願いたい。

○委　員：人材の育成に向けたプロセスということで、まず公民館が浮かんだ。公民館の利用者は年齢が高めのイメージがある。若年層をどのように取り入れるかについて、公民館の現在の状況が気になる。

○委　員：社会教育というと公民館が思い浮かぶ。10月に公民館のお祭りに行ったところ、お手伝いしていたボランティアに、PTAの方や中学生もいた。しかし、公民館の利用者層をみると平均年齢が高い印象がある。
公民館も様々な講座を企画していただいているが、どう就労者層を取り込むかが、これから

の課題であると考える。

○委　員：小学校に付随する団体（PTAやおやじの会）は、若い人たちと社会や行政が繋がる第１ステップだと考える。
将来の担い手の育成研修に関しても意欲的な人材が継続的に活動できるように何ができるかを考えていきたい。

○委　員：社会教育の担い手の発掘というところで、先日、小学校で子供縁日が行われた。
そこでは、ボランティアとして大人も多かったが、中学生も多く参加しており、楽しんでいる様子が印象的だった。
このようなお祭りを地域や学校単位で増やしていくと、人材の発掘をする場が増えると考える。

○委　員：先日、クリーンデーというものが行われ、参加者とともに多くの保護者が来てくれた。
その保護者の方は自分で申し込んでくる方なので、前向きな方である。そこで、参加者だった方が、今度は主催者側のお手伝いをする等、お手伝いから主催者になるというプロセスが増えるのではないかと感じた。
中学生ボランティアは中学校に募集をかけて参加してくれた。このような生徒は高校、大学に進学して、社会人になっても、また地域の活動に戻ってくるのではないかと考える。このような、活動を楽しみ、お手伝いをした若い世代が、また地域に戻ってくる循環を継続してしていけば、人材発掘の場に繋がると考える。

○委　員：①社会教育の担い手の発掘、②将来の担い手の育成、研修についてイメージしたことは、①は何かのきっかけがあり、社会教育に関わる。②は次にバトンを渡す。ここで気になるのは仕掛け作り、きっかけ作りである。②は担い手がどう次の人にバトンを渡すか、活動を広げていくかが重要である。社会教育を意識しないで地域のイベントに参加し、地域を知って、社会教育を意識するようになることが大切なのではないか。
随分前の話であるが、公民館を利用していた時に、「子供を預けられて便利だな。お手軽だな。」という気持ちで利用していた。そこで、ある公民館職員に「子育て中に公民館で学ぶことにどのような意義があるか理解しているか。」と問われた。公民館職員が、利用者に対して社会教育を意識づける目的での質問であり、その役割を担っていることを理解した。

○委　員：リーダーがいて、情報を集め、人材を見つけ出すことがプロセスとして大事なことだと考える。それぞれの専門性がある住民は多いと思う。そのような住民たちと協力したり、連携をしたりするためには、リーダーの資質が一番求められると考える。
子供たちに参画をしてもらい、子供会議のようなものを開催し、子供たちがどのようなことを望んでいるのか意見を吸い上げていくと、子供たちと大人たちとの接点が少しずつ増えていくのではないか。

○委　員：ここ数年で、社会教育士という称号が新たに加わり、社会教育士を目指してみようと考える学生が少しずつ増えてきた印象がある。学生を見ていると、広い世界に目を向けがちなところもあるが、地域教育、社会教育についてしっかり考えてみるような学習を行うことで、地域に目を向ける学生が増えるとよいと考える。

○議　長：社会教育というものを知ってもらうプロセスが必要なのであり、そのためにも社会教育士は重要であると考える。大学の社会教育専修というと「社会の先生になるのか」という会話から始まるようなことも多かったが、社会教育を知っている方からは、「公民館、博物館、図書館で活躍するのか」と分かってくださる方も多い。
これから社会教育がより地域に広がることを考えると、社会教育は自由なものであり、今や

っていただいていること自体が社会教育であるということを、体験的に知ってもらうようなプロセスが大事であると考える。

○委　員：公民館で若いお母さん方の様子を伺ったところ、育休の方が講座に参加されて、育休が終わると仕事に復帰されるので、公民館で長く活動していくことは難しい状況だと聞き、今まで社会教育を頑張ってきた世代から受け継いでいくことが難しい状況にある。
また、先日の小学校で開催したイベントでは、中学生も来てくれて、楽しんでいた。この循環が大切だと感じた。
子どもがいない等で、学校の活動に繋がりがない地域の方を、詳しく知らないからこそ、巻き込んでいく難しさも感じている。

○委　員：私は公民館と一緒に仕事をする場面がほとんどなかったので、公民館との距離はとても遠く感じている。おそらく中学生もあまり行けてないのでないか。若年層の公民館利用については何か根本的な対策が必要であると考える。
先月、中学生と地域の方と卒業生を一堂に集め、地域学校協働活動で何をしたいか話し合いを行い、そこでは、お祭りやイベントをやりたいという声が多かった。そして、地域活動に参加したいという大学生が多い印象を受けたが、参加していただくには、試験や就職活動の時期を考慮するなどの配慮が必要であると感じた。高校生や大学生を地域に巻き込むためにも卒業生とつながりを保ちたいが、先生方の異動の関係もあるので課題もある。
私の子どもの野球の手伝いの経験談であるが、最初は審判を頼まれても経験がないので嫌だった。それが、長年手伝うと、頼む方も私を指名してお願いしてくるようになり、信頼して呼んでくれていることに、嬉しく感じるようになった。地域の関わり方も、PTAのような組織の一員として参加していたところから、「あなたにお願いしたい」と指定して呼ばれるようになると、協力してくれるのではないか。そこまでのプロセスは難しいと思うが、このプロセスが持続可能な人材育成に関して重要な働きになると考える。

○委　員：学校教育、社会教育、家庭教育を連携していかねばならないと思う。
担い手は若い人たちだけではないと考える。子供やお母さんやお父さんだけでなく、卒業生や、シニア世代も担い手と言えるのではないか。
社会教育、生涯学習の目指すところである自己実現を見据えながら研修ができると良い。内容としては、地域の伝統や文化、自然や文化財、人権、マイノリティの方の理解、SNSの取り扱いについても勉強していく必要がある。

○委　員：人材は誰が発掘するのかという視点は大事であると考える。西東京市に子育てフェスタというイベントがあるが、今年、数年ぶりに実施できた。子育てフェスタを立ち上げた経緯としては、あるお母さんが産休・育休を取得後、市役所に行っても欲しい情報が得られず、出産や子育てに不安を感じ、社会福祉協議会の職員に相談したことによって始まった。子育てフェスタを実施するにあたり担当職員が垣根を越えて、様々な部門へ声をかけている様子を見て、人材を発掘する人はこのような人なのかと感じた。安心安全に子供を産んで育てるまちづくりというのも、社会教育の一つだと感じている。
また、イベントはきっかけの場として非常に効果的であると思う。ただ、「大きな花火を上げるので、どうぞ集まってください。」というよりは、その企画を作るプロセスからしっかり関わってもらえると、参加した方一人一人の背景や専門性など知ることができ、その中で自分の役割が見えてきて、みんなで同じ方向を向いて目的を達成できた体験が、次世代につなぐという点において重要であると考える。

○議　長：それでは（２）人材の活用についてご意見お願いしたい。

○委　員：小学校での地域生涯学習事業で英会話教室を実施するにあたり、英語が母国語の先生を探す

ように頼まれた。近隣の大学に電話をしたところ、すぐに見つけられた。やはり、勇気を持って皆さんに声をかけるということも、コーディネーターの役割として、大事であると思う。

○委　員：先週、おやじの会の連絡会を実施し、その中でお父さん、お母さんのお仕事を聞いていると、様々なスキルを持っていることに気づき、学校の職業講話の講師として、非常に効果的であると感じた。
イベントの企画をする際にも、頭の中のデータベースで、仕事の分担を考えているが、既存の人材のデータベースがあれば活用できるし、学校へも職業講話の講師として紹介できるのではないか。

○委　員：大学生も何か地域活動に参加したいと思っている人が多くいる。理想としては継続的に関われるものが良い。大学３年生くらいまでは、まだ余裕がある時期なので、社会教育を理解する機会にしていきたい。学生も多くの体験をしてきているので、意外と社会教育は身近なものであり、繋ぎ方次第で、学生の社会教育への理解も深まるのではないか。

○委　員：社会教育では実際にやってみることがすごく重要である。
次世代の地域の担い手である子供や若者を交えた全世代型の交流の場を設けることの必要性も感じている。全ての住民が社会参加できる仕組みをどのように作っていくか。
高齢化、貧困格差、グローバル化、障がい者、外国人、様々な困難を抱えている人たちが自己実現を図ることができるような仕組みを考えた時に、その中から人材が生み出されるのではないかと考える。
そして人材を確保するには、学習の機会提供をするということが一つポイントになる。同時に、PR（パブリックリレーション）、NPOや大学や企業等の、多様な主体による学習機会の提供が大事である。

○委　員：章立てにあるデータベースについては、「誰がそのデータベースを活用していくか。」ではなく、「こういうデータベースが必要である。」というような文章でまとめて方でいいのか。どのような形で提言としてまとめていくのかが少し気になる。

○委　員：人材のデータベースの整備と活用について、スキルを持った人がどこにいるのかを把握してないことには活用できない。現状の把握としてデータベースの構築が一番大事なのではないか。そして、個人情報になるので誰がそのシステムを構築して、誰が閲覧できて、誰が管理するのかは課題として大きなところである。

○委　員：①民間の資源＆ノウハウを活用、②NPO、大学、企業等、多様な主体による学習機会の提供については意外とそこまで難しくないのではないか。
特に学校では「何かやりたい」と言うと、多くの方が協力してくれる。ただ、全てに共通していることは、学校から声を掛けると協力してくれるが、企業からは声をかけてこないという点である。データベースを作り、いろいろなノウハウを構築したとしても、あくまで受身の人たちが大半であることも課題として考える必要があるのではないか。
また、既に活動している団体は良いが、そうではない団体が活動したくなる、しやすくなるために、学習機会の提供や研修を実施し、「こうすればできますよ。」という事例を紹介して、主体的に動く人たちを増やす必要もあると考える。

○委　員：様々な人を活用することはできるが、地域の活性化に向けた人材の育成のための活用なので、結局人材育成に繋がらなければならない。具体例を挙げると、講演会でオリンピアンを呼ぶと、夢や希望を与えられるだろうけど、目標とするには距離がありすぎる。
先程、職業講話の話が挙がったが、親の仕事であれば目標が身近であるから、「そこにたど

り着けるのかな。」と感じられるので、育成をするなら身近な人がいいと考える。また、企画から携わると、次に繋がるというような話があったが、お膳立てしたところから携わってもらうのではなく、一から企画に携わってもらえるとその面白さにも気付ける。どんな人を活用するかについては、育成に繋がるような人材の活用の仕方を考える必要があり、企画させてくれる人、企画をリードしてくれる人、企画を助けてくれる人が良いと考える。それが今回のテーマに向けた人材の育成に繋がると思う。

○委　員：人材の活用というのを、言葉を変えると、「まず見つける。そして、それを繋ぐ。」であると理解している。
持続可能を考えた時に人材をうまく活用するために、データベースを作る必要があると考える。西東京市にはどのようなデータベースがあるのかを洗い出したいと考える。

○委　員：①民間の資源＆ノウハウを活用については比較的地域の方が講師をされている地域生涯学習事業をイメージする。
子供たちも地域と触れ合いができ、地域の方が活躍できるためには、大事なノウハウを活用できる場を提供することが必要であると考える。
④人材のデータベースの整備と活用については、社会教育課にも人材データベースはある。人材のデータベースの整備と活用の一元管理ができるとよいと考える。

○委　員：スペシャリストではなくても、実は活躍できるということも伝えられれば良いと思う。
地域課題の解決の一つとして、当事者が主体になり、みんなで課題解決していこうというようなきっかけになるのではないか。

○議　長：今回の議論をもとに提言として文章化したものは来年２月に検討いただく。
次回は第３章の（３）多世代の人材が活躍するフィールド（４）社会教育関連資格の推進についてご検討いただきたい。

令和４年12月23日（金）午後２時
場所　田無第二庁舎　３階会議室